

平穏な朝は公共の充実の象徴である

大阪市立歌島中学校3年

林 大雅

朝起きる。朝食を食べる。着慣れた制服の袖に腕を通し、教科書を入れた制カバンを持って家を出る。そして、綺麗に整備された道路に面する、自宅のゴミ置き場にゴミ袋を置き、いつものように学校へ向かう——。日本という国に住まう私にとって、日常的でありふれたようにさえ感じられてしまう、そんな朝。ただそれは、世界に目を向けた途端に覆されてしまう、地球上においても貴重な、とても恵まれた朝なのである。

安心して夜を熟睡して過ごし、栄養素が豊富に含まれた朝食を食べることができる。無償で支給された教科書を使い、学校で質の高い教育を受けることができる。ゴミであふれかえった街になることなく、快適であたたかい地域コミュニティのもと、生活を営むことができる。いずれも当然のことに思えるが、現在ロシアによる侵攻が行われているウクライナや、今もなお断続的な紛争が続き、人権の保障がなされていない、アフガニスタン、リビアなどの国々、貧困問題の解決が急務とされる南アジア・アフリカの国々で生きる人々にとっては、決して当然なことであるとはいえないであろう。こうした背景には容易に片づけることのできない、複雑な対立や社会情勢が絡みあっているという。

一方、日本に住む私たちは、この恵まれた朝、何の不自由もない朝を「当たり前」のように感じる。それは、身のまわりの公共施設や公共サービスの圧倒的な充実起因していると、私は考える。これらの公共事業をずっと支えているのが税金だ。税金と聞くと、マイナスな方向に考えてしまう人も多いだろう。

私自身、税金と言われると、「物を購入する際に毎回やみくもに支払っているお金」いわゆる消費税とそれに対する負なイメージが、最初に思い浮かんでいた。だが、この作文を書くにあたり税について学んでいくと、想像していた以上に、私たち学生の生活にも密接に関わりあい、知らぬ間に心身のサポートまでも税金が担ってくれていたことを知った。

さらには、前述のような開発途上国に対する援助であるODA（政府開発援助）にも税金が使われ、当該国々の技術協力などの面でも活用されている、ということも学んだ。

事実として、税金は医療・福祉・社会保障などの面で、多くの人々の命を助け、生活を支援しているといえる。また、その支援の幅は、国内のみならず、海外までに広がっている。確かに、税金の存在は納税の義務を課された私たち国民にとって、良い印象を持つことが難しいという側面もある。実際に、ひとたび「増税」の語が報道にあがると、ネット上は大騒ぎになり、反論や意見の嵐に包まれる。だが一方で、税金を納めることによるメリットについて、正しい知識を持つことも必要であるといえる。私はこれから税金と真剣に向き合い、平和で穏やかな日本の朝を持続し広めてゆける、そんな納税者になりたい。